

あった」と中心集落が移ろい易いものであるにせよ、その変遷の一時期の集落景観を復元して、中世独自の世界を提示した本書によって冒頭の問いは減じるであろう。

二、三の疑問を記させて頂くと、著者の指摘の如く戦国城下町は①領主の居館②家臣団の居住域及び③城下市町から構成される。とくに一部二部では①②はほとんど無視されている。戦国期の中心集落の階層を問題とする時、①②をある程度捨象しなければ得られない結論かもしれない。それは、現代都市を扱った中心地理論も、やはり商業を重視して、他の機能を軽視する点と軌を一にしている。また城館と市町及び市場町をセットして論じた10章の場合は、逆に階層構造は無視せざるを得なかった点に示されている。

第二に城下市町の階層を示す名称が、国人領主、戦国大名という歴史用語で示されている。地理学的手法で区分した町を、地域差、時期的変化の大きい歴史学の用語を借用して呼ぶのは誤解の生まれる危険を感じさせられる。

用語に関しては、8章の類型化された町の名称が「在町」「地方都市」と記され、前章と不統一なものが見受けられる。

最後に読者への便を考えてみると、本書は著者の綿密な調査と歴史学の深い素養を背景に書かれている。本書の初めから読み進むと大半の読者は迷路に入ってしまう可能性がある。終章・序章・8章を読んだうえで、1章から読み始めれば、中心地理論を念頭においた、大きな構想のもとに、着実な実証を積み重ねた著者の意図が十分に伝わってくるであろう。

最後に本書の内容を不十分な理解で評した部分は紹介者の浅学故とお詫びしたい。（水田義一）

菊地利夫著：続・新田開発一事例編：古今書院

1986年5月 A5判 758頁 15,000円

歴史地理学研究で、過去、菊地氏の『新田開発(上)、(下)』古今書院(1958)、同書改訂増補版(1977)ほど他分野に影響を与え、かつ評価された書物は少ない。この名著の続編が、このたび約30年の歳月を経て公刊された。事例編と銘打つ本書は、氏が主として30歳代に精力的に実地踏査された新田村の事例研究のうち、再調査、加筆された17編からなっており、総論編にあたる前書の作成過程を知るうえでも、ま

た、氏独自の歴史地理学方法論（『歴史地理学方法論』、大明堂、1977）を理解する上でも、非常に貴重な意義を持つ書物である。まず、本書の構成を次に示しておこう。

序章 新田の理論、事例論文の背景と意義

第1章 武蔵野の開拓路村とその土地生産力—青梅街道の開拓路村小川村を中心として—

第2章 隠遁武士の見立新田としての新島料十六島新田

第3章 見立新田の開発者に与えられた除地の経営—信濃国五郎兵衛新田の事例—

第4章 滝名川二十七堰懸りの水利慣行と扇状地の開発過程

第5章 信濃国松川扇状地の畑作新田の開発と田成畑の諸問題

第6章 笠懸野扇状地における代官見立新田としての開拓路村とその開発意義

第7章 片品川流域における近世山村の二面的性格の展開

第8章 小櫃川上流における畑作村落から水田村落への転換

第9章 九十九里浜のイワシ漁業の豊凶と臨海集落における新田開発

第10章 日川砂漠における柳川新田の開発

第11章 干潟八万石の干拓と用水・排水の諸問題

第12章 村受干拓としての飯沼新田の諸問題

第13章 九十九里平野における塚崎新田の開発と「池田」の排水権慣行

第14章 先進地型町人請負新田としての大宝前（神戸）新田の諸問題

第15章 福田沖新開の開発と地域経済の近代化

第16章 熊本藩の村受新田としての百町新地・四百町新地・七百町新地の諸問題

第17章 弘前藩の新田開発—小知行派・御蔵派・藩営新田

付章 近世全国国郡石高帳の解説（国別・郡別の石高表）

各章の記載内容については、各々その原論文がすでに各種雑誌に発表され読者の目にとまってきたことと、本書序章に著者自らの手でコンパクトにまとめられていることにより、ここで改めて紹介することは割愛したい。

さて、事例編とはいえ、単なる事例研究の羅列ではなく、上記17編は氏の新田の理論の構想にしたが

って厳選、配列してある。氏の新田理論は、開発主体の違いにもとづいて新田を類型化することを基軸とし、その歴史的系列と地域区分を明らかにすることにある。

氏の示す九つの新田類型と本書での記述箇所は次のとおりである。近世の地方書、幕府・諸藩の新田法令に使用され、従来の新田研究で用いられてきたものとして切添新田（独立した章にはなっていないが6、12章など）、村受新田（1, 5, 9, 12, 16章）、見立新田（1, 2, 3章）、代官見立新田（6章）、藩営新田（8章）、町人請負新田（10, 11, 13, 14章）をあげ、それに氏が新しく見いだした藩士知行新田（17章）、百姓寄合新田（15章）、さらに喜多村俊夫氏が『新田村落の史的展開と土地問題』（岩波書店（1981））で提示した藩主直営（家産）新田（17章）を加えている。

近世においてこれらの新田の出現した時期により地域差があることを確認し、各新田類型、とくに村受新田、藩営新田、町人請負新田、においてそれぞれの発展型に移行しているかどうかを主基準、年貢と自給の農業経営の段階、商品作物の生産と国内市場への参加状況段階を副基準として先進地、後進地別の地域区分がなされている。こうして示されたのが一、後進地帯（1）東北日本（奥羽・東関東・北陸）、（2）西南日本（南四国・南九州）、二、先進地帯（1）東部（西関東・東海・中部地方の盆地）、（2）中央部（畿内とその周縁）、（3）西部（瀬戸内海沿岸・山陰・北九州）である。

以上、ごく簡単に本書の構成と主旨について概観した。以下において少々私見にもとめすぎる点もあるが本書の意義と問題点を述べてみたい。

第1に、新田開発の類型化とその発展型の有無による地域区分を試みられた点は「総論編」と併せて本書の特色でもあり最大限に評価されるところである。ただ、細部に於て若干の疑問点があるのでそれを示しておきたい。その一つに、先進地、後進地の区分基準に不明確な箇所がある。たとえば、「村受新田ならば、村落共同体による開発の段階にあれば後進地帯であり、その発展型の百姓寄合新田に移行していれば先進地帯とする。」（p.23）、とある一方、百姓寄合新田の説明として「西日本とくに瀬戸内や有明海沿岸にて行なわれた農民の開発様式であり、先進地型と後進地型にわけられる。」（p.20）。また、町人請負新田についてであるが、永小作権を与え新田百姓を優遇せざるを得なかった後進地型と普通小作

権しか認めず企業利潤を獲得できた先進地型に分けているが、町人資本で開発すること自体先進地的であると言えないこともない。そうだとすれば、町人請負新田が全く成立しなかった地域とそうでない地域との差異を重視して前者を後進地、後者を先進地と分類してもよからう。こうした個別の疑問は別としても、地域区分方法に九つの新田類型の相互間に発展系列を認め、そこで先進、後進地の区分をする場合と、各類型のなかでの発展型をもとに区分する場合とがあり、その整合性がはっきりしていない。また、氏本来の主旨から言えば、新田の発展類型を主指標とした区分方法が優先されるべきであるが、農業経営の段階等の副指標を優先した区分に従っているように思える。

ところで、上記に大別された5地区を、この分類が近世終了時に立って過去を振り返り発展系列をとらえた区分になってはいるものの、それぞれ先進地と後進地に分けて固定的にとらえていいのであろうか。いみじくも先進地東部の説明のところで「この地域が先進地帯に発展したのは近世中期からであり……」（p.25）とあるように、近世前期時点での各地区の先進・後進性をおさえるとともに、後進→先進、あるいはその逆などの変化をもとにした区分も考えてみる必要があろう。

先進地、後進地という言葉は多くの研究者によって使われているが、その範域設定に関しては必ずしも共通した認識の上には立っていない。先進・後進という基準で地域区分することの是非を含めて先進・後進地論を再考するにあたっての課題は多い。

さて、第2にこの書物が菊地氏の歴史地理学方法論に従って書かれている点が興味深い。氏の方法論上のキーワードは「時空連続体」すなわち時間的厚みを持った空間である。新田開発が芽生え、その性格と機能が完全に発達し、ついに消滅した時間の経過を念頭にいった地域研究になっている。とくに、「近世山村の研究として、人口・耕地の多い林業集落の時期のみを取り上げたり、あるいは人口のすくない農業集落のみを対象とするならば、その山村研究は山村の本質の半面を見失った研究であるといわねばなるまい。」と述べ、近世山村の二面性を指摘した第7章、畑作村落から水田村落への転換を述べた第8章、漁業の豊凶と新田開発の関係を述べた第9章などに著者の執筆姿勢がよくあらわれている。

ただ、事例研究の実証部分に時として不可解な箇

所がみうけられる。ここでは少々紙面をさいて第7章を取り上げてみよう。はたして著者が指摘するほど近世山村の二面性があらわれていたであろうか。

「山留め」「山開き」文書をもとに前期林業集落の時期を寛永一天和期(1624—1682)、後期林業集落の時期を元文一寛政期(1736—1789)とし、その中間の林業衰退期を農業だけに依存した前期農業村落の時期としている。ところが、こうした時期設定にもかかわらず、林業が衰退している時期に林業活動が非常に活発であったことをうかがわせる事例が随所に示されている。たとえば、元禄期から笹板と曲物の買占商人が文書にあらわれてくるとして、同8—16年(1695—1703)までは大間々町の彦兵衛(以下略)等の商人名が列挙してある(p.287)。また、正徳元(1711)年に運上金をモミ板1枚に永1文、雑木板1枚に永5厘とし、この年だけでもモミ板7,230枚、雑木板815枚、この運上金は7貫67文になっている(p.288)。とあり、とても農業だけに依存した時期とは考えられない。

ところで、著者の意図とはかけ離れるかもしれないが、事例研究集成を読む楽しみは、各編を読者の勝手な思考のもとで読み比べることにある。たとえば、第7章と第9章。前者は先に示したように山村(片品川流域)で、林村期と農村期が交互に、後者は臨海集落(九十九里浜)で漁村期と農村期が交互にあらわれる。ところが新田開発の時期が違うのである。前者では林村期に人口が増え、その食料確保のために新田開発が行われるのに対して、後者では漁村(豊漁)期に人口が増えるのだが、その時期に新田開発は行われずに農村(不漁)期に開発が行われる。林民と漁民の定着性の違いにその原因があるのであろうか。山村と漁村の集落発達史を考える上において興味深い事例となっている。

また、新田開発農民の出身地に焦点をあてて読むと意外な事実も明らかにされる。大半の新田村において新田百姓の出身地は第1章の第4図(小川新田)、第5図(新町新田)であらわされているように、新田の周辺地区からの流入である。ところが、茨城県鹿南砂丘にある柳川新田の場合(第10章)、嘉永2(1849)年に銚子に漁業出稼していた越後人を120名も入植させ、その家族を国元から呼びよせている。また、安政3(1856)年に八丈島で新田百姓を募集して10戸、41名の入植があった。漁民と農民の出会い、そして移住。近世の地域間交流の実態を究明し

ようとする者にとって、その間の事情、その後の展開等を追跡したくなるような刺激的な記載である。

さて、随分と横道にそれてしまったが、最後に一言付け加えておきたい。本書はオーソドックスな新田開発研究を志す者にとって必読の書であることは言うまでもないが、歴史地理学初心者にとっても格好の入門書になっている。フィールドワークをかさねて独自の理論を構築する過程、対象地域の自然環境を重視する立場、古文書のあくなき収集とその利用、図表の美しさ、等々、学ぶべき点が多い。

(溝口常俊)

山田安彦著 古代の方位信仰と地域計画 古今書院 1986年4月 A5判 290頁 3,800円

この書を読みながら、古代を探ることと想像との境界線を引くことのむずかしさを痛く感じないわけにはいかなかった。つまり古代研究は他の時代に比較して史料の少ない分野であるため、想像がふくらみやすい空間である。本書の主題である方位論については、テーマとしてはことさら珍しくはない。最近の大衆向けの古代関係の書籍にはよくみられるものである。例えばある古墳と石造物を結ぶと正南北でそれに直交する線の上に、ある山と神社がのる。それゆえにこの南北線と東西線は意味のある線、つまりは神の道であるといった類いのものである。そのような試みが少なくないにもかかわらず、これぞという説が認知されないのは、その手続きに基本的な欠陥か、ないしは甘さがあるためである。ということは、古代において方位がなんとなく意味をもっていたことは感じられても、それを証明するまでの過程が想像以上に困難であることによる。

だが、方位論はすぐれて地理的な問題である。同時に歴史的な所産でもある。その点からいえば、歴史地理学の立場から古代の方位論を探求しようとする著者の意図は正しいといっていよいであろう。

著者の古代歴史地理学の専門家としての見識と良心をもって本書が著わされたことは、随所に「偶然とはいえないような、意義付けがあるように思われる」(143頁)とか「まったくの偶然であろうか」(160頁)、あるいは「かかる配置を偶然の結果として見捨ててよいものであろうか」(166頁)、さらには「それとも偶然の一致なのか」(212頁)という表現からうかがいしることができる。だが、このような著者の慎重な言い回しとは裏腹に、「偶然」でない